

令和4年度小平市立小平第十四小学校～「全国学力・学習状況調査」結果概要～

1 調査目的・対象

児童・生徒の学力や学習状況を把握・分析し、成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、今後の児童・生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てるための調査です。

2 調査内容

(1) 教科に関する調査

身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等、また、知識・技能を実生活の様々な場面で活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等に関することを児童が答える調査です。

(2) 生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査

学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関することを児童が答える調査です。

3 各教科の調査結果の分析

【国語】

状況の分析

正答率は全国平均より 7.4 ポイント高く、東京都平均より 4 ポイント高かった。特に、人物像や物語の全体像を具体的に想像するという「読む」に関する問いでは、東京都平均より 17.4 ポイント高かった。一方で「書く」に関する問いでは、昨年度は東京都平均よりも 6.2 ポイント低く、今年度も 0.5 ポイント低い結果ではあるが、改善している。

課題

令和元年度から「書く」ことについて課題が残る。特に、「書く」の中の「文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章の良いところを見付ける」問いに対しては正答率が全国平均より 6.2 ポイント低く、無回答率も全体の 15.6%と高く、そもそも学習経験として少ないことがうかがえた。

学校で取り組む具体的な改善策

- 国語の授業において書く力を向上させるための取組を重点化し、実践する。例として、
- ・教科書などの例を参考に、意見文や提案書などの書き方に慣れるよう定期的に「書く」指導を行う。
 - ・新聞記事などを読み、自分の意見や考えを記述する時間を確保する。
 - ・一定の時間内で感想を書いたり推敲したりするなど、時間を意識した指導を行う。
 - ・学習者用端末を活用し、友達の表現の仕方を見たり、話し合ったり、評価し合ったりする時間を確保する。

【算数】

状況の分析

正答率は、全国平均より 10.8 ポイント高く、東京都平均より 7 ポイント高い。「数と計算」「図形」「変化と関係」「データの活用」の全ての領域で東京都の正答率を上回った。「図形」に関する問題では、昨年度は東京都平均より 3 ポイント低かったが、今年度は東京都平均より 7.6 ポイント高くなった。これは、昨年度の課題を踏まえてデジタル教科書を活用し、視覚化しながら問題解決的な学習に意識的に取り組んできた成果と考えられる。

課題

令和元年度からの課題であった「図形」「変化と関係」に関する問題の正答率が東京都平均を上回ったが、引き続き継続して取り組んでいく。問 1 の 1050×4 の正答率が東京都平均より 4.4 ポイント低かった。6 年生は毎日 5 分間の計算問題の取り組みを継続しているが、分数や小数の計算問題が多かったため、2 学期以降は整数の基礎的な問題にも取り組めるようにしていく。

学校で取り組む具体的な改善策

- 算数の授業において「数と計算」「図形」「変化と関係」についての技能を向上させる。例として、
- ・整数、小数、分数についての計算プリントの活用。日々の計算問題を行う時間の確保。
 - ・図形の性質や構成要素に着目させ、活動を通して図形についての理解を深められるようにする。
 - ・実態に応じて、苦手な領域のベーシックドリルを活用する。
 - ・デジタル教科書を活用して、「図形や変化と関係」を視覚化して理解を深められるようにする。

【理科】

状況の分析

正答率は、全国平均より 9.7 ポイント高く、東京都平均より 8 ポイント高い。「エネルギー」「粒子」「生命」「地球」の全ての領域で東京都の正答率を上回った。特に「エネルギー」に関する問いについては、東京都平均より 10.7 ポイント高かった。本校は高学年に理科の T2 の講師が入っている。教材教具の準備や実験の補助などの授業外のサポートや、授業中に適宜講師による補足説明なども取り入れていることから、担任と連携して取り組んでいる成果と考える。

課題

「粒子」の領域の正答率が一番低い、東京都平均を 4.2 ポイント上回っている。問題の内容は水溶液を凍らせる実験に関するものとなっている。その中の「メスシリンダー」の名称を答える問題のみが東京都平均より 4.8 ポイント低かった。このことから、実験活動の中に、実験器具の名称なども改めて確認する必要があると考える。

学校で取り組む具体的な改善策

- 理科の授業の実験において、器具の正確な名称や扱い方について定着させる取組を重点化し、実践する。例として、
- ・講師と連携して、予備実験などで児童が安全でスムーズに実験活動を行える計画を立てる。
 - ・実験活動の中で、実験で扱う器具の名称を改めて確認し、正しく実験を行える時間を確保する。
 - ・教科書の巻末ページや教材動画などを活用し、実験結果だけでなく包括的な学習のまとめを行う。

生活習慣（家庭環境によるもの）に対しての意識が高く、肯定的な意見が東京都平均を 5～10 ポイント上回った。しかし、スマートフォンの使い方についてのみ、家での約束を守っている児童が東京都平均をやや下回った。「先生は、あなたの良いところを認めてくれていると思いますか。」の問いについては、全児童が肯定的な回答をしている。学校での ICT 機器の活用については高い傾向にあるが、役に立つかという問いについては東京都平均より 2 ポイント低かった。学習に対しては意欲が高く、点数として結果も現れている。

地域をよくする思いについては東京都平均より約 10 ポイント高い。しかし地域の行事に参加している児童の割合は全国・東京都平均よりも数%低い。コロナ禍での体験活動の機会の確保や参加する意欲付けについてコミュニティ・スクールとしても検討する必要があると考える。

理科の学習については、肯定的な意見は多いが、国語・算数に比べて「どちらかと言えば、あてはまる」が多い。そのため、将来、科学技術に関係する職業を希望する児童が東京都平均より約 10 ポイント低い。

学校で取り組む具体的な改善策

- ・生活指導では、保健だより・給食だより・SNS がんばりカードなど、家庭と連携した取組を長期休業期間を意識して学校から発信を継続していく。
- ・コミュニティ・スクールの会議を利用して、コロナ禍でも充実した取組が行えるように地域の人材を活用して地域行事の体験活動について検討を重ねていく。
- ・ICT 機器の活用については、活用自体が目的ではなく、手段として活用できるように改めて授業計画を立てる。
- ・理科の講師との連携、より質の高い理科学習の提案、地域人材による科学実験教室の開催など、理科的活動の量を増やし、質も高めていく。